

北海道野菜の作付動向と今後の問題点

北海道立道南農業試験場

主任専門技術員

餘 助 良 二

北海道における野菜栽培は古くから行われていたが、近年は水田利用再編対策の影響や野菜の生産・出荷体制が急速に進んだこともあって、北海道の野菜栽培は特産野菜を中心に年々盛んになっている。

特に道外移出向け野菜は増加の傾向にあるので、今後野菜の栽培に当たっては、生産の安定・コストの低減・品質の向上に努め、更に北海道野菜として継続的な生産・出荷のできる産地づくりを進める必要がある。

主な野菜の作付動向

北海道における野菜栽培は、近年、需要の多様化しているなかで、品目によってかなりの変動はあるが、野菜の需要が横ばいに推移している状況のもとで、北海道としては野菜の作付面積・生産量とも増加の傾向にある。

1 作付の増加傾向にある野菜

近年、作付が増加している野菜としては、ニンジン、カボチャ、スイートコーン、キャベツ、タマネギ、グリーンアスパラガス、露地メロン、ハウレンソウ、それに西洋野菜のレタス、カリフラワー、ブロッコリー、ピーマン等がある。

この中、タマネギ、ニ

ンジン、カボチャ、食用ユリなどは、北海道の特産野菜として古くから栽培されていて、府県へ多く移出されているもので、これらの野菜は畑作的野菜として広い面積にわたって作付されている。

このほか、近年は、本道の夏季冷涼な気象条件と広い土地条件をよく生かして、夏の栽培が可能な露地メロン、スイートコーン、キャベツ、ハクサイ、ハウレンソウ、グリーンアスパラガス、ダイコン、ネギ、莢エンドウ、カリフラワー、ブロッコリー、レタスなどの作付は年々伸びている。

2 作付が減少傾向にある野菜

北海道で、近年、作付が減少傾向にある野菜としては、ナス、スイカ、キュウリ、トマト、ハクサイなどで、減少の理由には需要の減少、連作障

表1 北海道の野菜作付面積と収穫量

区 分	昭40	45	50	55	56	57	58	58/50
作付面積 (ha)	48,400	49,700	53,700	50,800	52,300	54,800	56,100	104.5%
収 穫 量 (t)	809,001	1,009,852	1,137,034	1,238,508	1,043,325	1,312,330	1,234,425	108.6

資料：「農林水産統計年報青果物編」「耕地及び作付面積統計」による。

表2 北海道の野菜作付面積の推移

(単位：ha)

区 分	昭53	54	55	56	57	58	58/53
野 菜 合 計	53,600	50,300	50,800	52,300	54,800	56,100	104.7%
ト マ ト	711	660	639	581	557	546	76.8
キ ュ ウ リ	822	773	721	668	657	628	76.4
カ ボ チ ャ	3,650	2,870	3,560	4,180	4,600	4,430	121.4
未成熟トウモロコシ (スイートコーン)	12,000	9,720	10,400	11,800	13,500	14,200	118.3
タ マ ネ ギ	8,670	8,550	7,910	8,080	8,370	8,710	100.5
ハ ク サ イ	2,090	2,050	2,040	1,960	2,040	1,990	95.2
キ ャ ベ ツ	1,870	1,830	1,880	1,870	1,990	2,060	110.2
ホ ウ レ ン ソ ウ	768	777	883	1,030	1,130	1,120	145.8
ダ イ コ ン	4,190	4,270	4,410	4,360	4,370	4,280	102.1
ニ ン ジ ン	3,370	3,510	3,580	3,920	4,270	4,400	130.6
ス イ カ	1,300	1,250	1,210	960	839	849	65.3
露 地 メ ロ ン	1,110	1,100	1,100	1,140	1,220	1,250	112.6
ビ ー マ ン	147	149	156	151	157	164	111.6
レ タ ス	328	416	504	521	544	580	176.8
カ リ フ ラ ワ ー	89	101	103	110	107	133	149.4
ア ス パ ラ ガ ス	4,940	4,800	4,870	4,820	4,990	4,960	100.4

資料：「北海道農林水産統計年報（総合編）」による。

害の影響、府県産ものとの競合、栽培に労力が多くかかり時間当り労働報酬が低いなどによるもので、なかには作付面積は減少の傾向にあるが、作型によっては作付が伸びていて立派な産地が維持されているところもある。

野菜の生産と流通

1 道産野菜の出回り状況

北海道における野菜の生産・流通については表3のようになっていて、北海道の野菜生食向け消費量は少しずつ減少の傾向にある。昭和58年では、584,188tになっている。このうち、北海道産もの出回り量についてみると、昭和48、52年に比べ最近では減少している。昭和58年では397,232tになっていて、北海道産野菜の出回り率は68.0%である。

2 道外からの移入量

北海道へ道外からの入荷量はあまり大きな変化がなく、昭和58年では186,854tの入荷をみている。

このうち、道外からの入荷割合の多いのは、昭和58年の場合では、ナス16,258t(入荷割合

表4 北海道の冬期間(1～5月,12月)における生食向け野菜出回り状況 (昭和58年)

区 分	道 産	移 入	計	道 産 出 回 り 率
	t	t	t	%
ナ ス	0	4,923	4,923	0
ト マ ト	284	6,437	6,721	4.2
キ ュ ウ リ	648	10,454	11,102	5.8
カ ボ チ ャ	764	267	1,031	74.1
青 英 イ ン ゲ ン	3	260	263	1.1
青 英 エ ン ド ウ	0	539	539	0
タ マ ネ ギ	18,658	4,900	23,558	79.2
ネ ギ	2,034	6,008	8,042	25.3
ハ ク サ イ	4,454	15,476	19,930	22.3
キ ャ ベ ツ	6,437	15,734	22,171	29.0
ホ ウ レ ン ソ ウ	1,957	4,917	6,874	28.5
ダ イ コ ン	9,619	11,879	21,498	44.7
ニ ン ジ ン	2,757	5,358	8,115	34.0
ゴ ボ ウ	3,307	413	3,720	88.9
ヤ マ ノ イ モ	3,031	836	3,867	78.4
イ チ ゴ	187	6,431	6,618	2.8
ビ ー マ ン	2	2,518	2,520	0.1
レ タ ス	1,366	4,425	5,791	23.6
セ ル リ ー	166	1,632	1,798	9.2
カ リ フ ラ ウ ー	11	963	974	1.1
ア ス パ ラ ガ ス	1,309	83	1,392	94.0

資料：北海道農林水産統計年報(青果物出荷編及び青果物市場編)、及び札幌市中央卸売市場年報等による。

表3 北海道における野菜流通状況

(単位：t)

年 度	道内生産量 (A)	野菜生食向け消費量				加工向け (E)	移出量 (F)	道産出回り 量合計 (B)+(E)+(F)
		道産出 回り量 (B)	移入量 (C)	計 (D)	道産出 回り率 (%)			
昭48	1,150,449	548,166	173,507	721,625	76.0	121,005	270,077	939,198
52	1,237,699	459,237	184,911	644,184	71.3	201,533	399,392	1,060,198
56	1,043,224	360,077	196,223	556,300	65.0	168,074	370,682	898,833
57	1,312,330	433,910	193,216	627,126	69.0	213,853	498,993	1,146,756
58	1,234,425	397,232	186,854	584,188	68.0	181,413	496,831	1,075,476

資料：「北海道農林水産統計年報」(青果物市場編及び青果物出荷編)等から作成。

86.5%)、イチゴ6,116t(69.4%)、ピーマン3,924t(63.1%)、スイカ19,842t(56.1%)、莢エンドウ674t(55.3%)などがある。

道外からの移入量のうち、冬期(12月～翌年5月まで)の入荷量は表4のようになっていて、主要野菜27品目の年度別は、昭和50年101,735t、昭和55年106,631t、昭和57年121,969t、昭和58年109,308t入荷している。

昭和58年についてみると、道産野菜で出回り率のよいものは、グリーンアスパラガス(94.0%)、ゴボウ(88.9%)、タマネギ(79.2%)、ヤマノイモ(78.4%)、カボチャ(74.1%)、次いでダイコン(44.7%)、ニンジン(34.0%)、ハウレンソウ(28.5%)、キャベツ(29.0%)、ネギ(25.3%)、レタス(23.6%)、ハクサイ(22.3%)などで、積雪寒冷地の本道にとっては、冬期間の野菜生産・出荷には貯蔵野菜以外は出回り量が少なく、府県産野菜に大きく依存しているのが現状である。

従って冬期間になると府県産のキャベツ、ハクサイ、ダイコン、キュウリ、トマト、レタス、ネギ、ナス、イチゴなどが大量に北海道へ移入されている。

3 加工向け野菜

北海道産野菜には加工向け原料用の野菜も数量的に大きな割合を占めていて、表3のように多く昭和57年は213,853t、昭和58年は181,413tになっている。

昭和58年の加工向け野菜の主なものは、スイートコーン83,836t、ダイコン43,665t、カボチャ12,456t、ニンジン8,837t、アスパラガス6,476t、ハクサイ2,758t、キャベツ2,351t、ハウレンソウ997t、ネギ975t、キュウリ884t、ゴボウ194tなどとなっている。

4 道外移出向け野菜

道外移出向け野菜については、年々増加の傾向

表5 北海道産主要野菜の移出向け出回り量の推移

(単位：t)

区分	昭50	55	57	58	58/50
トマト	—	185	248	213	—
カボチャ	22,880	27,726	31,893	26,396	115.4
未成熟トウモロコシ (スイートコーン)	3,922	5,678	3,569	2,405	61.3
青葱	—	0	68	128	—
タマネギ	229,147	331,820	344,079	334,289	145.9
ネギ	—	88	1,073	1,803	—
ハクサイ	315	5,290	4,346	5,391	1,711.4
キャベツ	23	3,179	7,171	10,348	44,991.3
ホウレンソウ	—	993	1,594	1,894	—
食用ユリ	1,150	1,700	1,765	2,061	179.2
ダイコン	1,141	8,399	16,280	16,303	1,428.8
ニンジン	46,013	75,651	75,785	84,449	183.5
ゴボウ	58	577	1,209	862	1,486.2
ヤマノイモ	185	704	822	440	237.8
スライモ	1,564	1,050	487	757	48.4
露地メロン	446	1,691	3,024	2,403	538.8
レタス	9	—	1,100	1,818	20,200.0
アスパラガス	280	3,389	3,514	3,820	1,364.3

資料：「北海道農林水産統計年報」（青果物出荷編）等から作成。

にあつて、昭和50年では307,135tであつたが、昭和58年には496,831tになっている。

近年は、表5のように、北海道から道外へ出荷する品目も増加し、大部分の品目では年々増加していて、従来から北海道特産野菜といわれていたタマネギ、ニンジン、カボチャ、食用ユリなどのほか、最近では夏場を中心にダイコン、キャベツ、ハクサイ、露地メロン、グリーンアスパラガス、スイートコーン、ホウレンソウ、レタス、ネギ、それに関西市場向けとして、ヤマノイモ、ゴボウなどの生産・出荷が盛んになっている。

5 施設園芸

ビニールハウスなど施設園芸は府県のように盛

表6 野菜用ガラス室及びハウス類の栽培延面積

(単位：㎡)

年度	昭42	50	52	54	56	58
トマト	427,962	975,235	868,339	894,810	772,794	958,061
キュウリ	186,753	481,157	690,602	703,720	670,979	967,340
ナス	39,776	29,343	68,395	61,245	22,823	28,478
ピーマン	7,219	45,190	80,183	83,210	83,635	217,886
カボチャ	440	13,205	49,290	3,628	12,026	145,971
温室メロン	7,600	117,729	41,850	78,660	45,953	271,385
メロン	23,668	207,756	407,726	615,600	804,952	1,243,348
イチゴ	5,520	108,634	377,640	478,570	444,383	538,238
スイカ	11,887	62,686	175,360	194,180	174,548	113,818
レタス	4,826	36,153	141,980	154,740	173,643	241,455
セルリー	1,510	42,620	59,760	116,490	195,803	184,928
ニラ	—	89,549	101,150	196,140	148,200	80,071
刈タイナ	—	—	—	105,320	120,537	—
ミツバ	—	—	—	49,800	176,350	145,039
ホウレンソウ	—	—	—	—	708,170	1,240,256
ハクサイ	—	—	—	—	173,279	156,652
その他	75,388	251,078	552,052	563,720	538,232	1,079,111
計	795,798	2,460,335	3,513,177	4,299,833	5,266,307	7,612,037

資料：北海道農務部稲作園芸課調べ。

んではないが、北海道は積雪寒冷地という特殊な気候条件にあるため、野菜作付面積の割合からみると施設園芸の面積は少ないけれども、北海道産野菜の不足する時期の生産に大きな役割を果している。

野菜用ガラス室及びハウス類の栽培延面積は表6のようになっている、昭和48年のオイルショック以降一時栽培面積は減少をみたが、その後、昭和55年から続いた冷害の影響もあつて、施設園芸は天候不順な年でも安全確収ができるので、施設園芸による栽培面積は、その後著しい伸びを示している。

一方、雨よけ栽培についても近年急速に増加していて、ホウレンソウ、トマトなどの生産安定と品質の向上に効果をあげている。

ハウスでの栽培は、メロン、ホウレンソウ、キュウリ、トマトなどの作付が多く、このほか、ピーマン、イチゴ、レタス、ハクサイ、セルリー、ミツバ、刈タイナなどが栽培され、道産野菜の端境期に生産が行われている。

北海道の施設園芸は、冬期間の栽培になると温度・日照不足などの影響があるので、冬期間は一般に低温で生育する刈タイナ、ミツバなどを主に栽培しているが、近年は省エネルギー施設が普及している。

森町・壮瞥町などでは地熱水・温泉熱を利用、札幌市では都市ごみ燃焼熱の利用、東神楽町ではオガクズ・廃油を利用した省エネルギー施設園芸が導入され、主にトマト、キュウリ、刈タイナなどを栽培して省エネルギーを図っている。

野菜栽培の問題点

1 個人差、産地間差をなくすること

北海道の野菜栽培は栽培面積、生産量とも増加し、野菜の品質も年々向上をみているが、今後更に産地化を進めていくのには、出荷する野菜に生産者の個人差、産地・農協ごとに品質格差が生じないように努力する必要がある。



写真1 冬期出荷用の貯蔵ハクサイ収穫状況(上磯町)

近年、北海道産の一般野菜も道外移出が盛んになってきているが、ダイコン、キャベツ、ハクサイ、レタス、ハウレンソウ、メロンなどに産地ごとの品質格差が見られるので、この点をよく留意して立派な産地づくりを推進することがたいせつである。

北海道産の野菜は品質的には立派であるが、品揃いが良くない傾向にあるので、出荷規格に基づいて選別を更によくするように心掛ける必要がある。

2 継続的出荷体制の確立

北海道産野菜を有利に販売していくためには、品質の良い野菜をなるべく長期間継続出荷していくようにしないと有利販売につながらない面があるので、今後はどうすれば継続出荷ができるかを産地において更に検討してみる必要がある。

北海道産の夏野菜に品質格差が生ずるということは、広い北海道に特定の野菜が極く限られた地域に散在していて、生産・出荷にしても一本の線のように体系的につながっていない場合が多いので、この点を更に改善してみる必要がある。

また産地においては品質の良いものを多く生産するために、栽培適地の選定、品種の統一、播種時期の決定、栽培技術の統一、適期収穫の徹底など生産者自らが努力目標に向かって品質の良い野菜を穫るよう強力に推進する必要がある。

3 品質の良いものを生産する

例えば、品質の良い夏秋ダイコンを穫ろうとするのには、品種、播種時期の選定もたいせつであるが、栽培適地の選定が重要で、広い北海道の畑地であれば、どこでもよいというものではなく、作土が深く、保水性・排水の良い砂壤土・火山性



写真2 夏秋どりダイコンの生育(上磯町)

土などで、肌がきれいで、ひげ根が細く、きれいな品質の良いダイコンが穫れる。

ダイコンは地力や土壌病害虫による品質格差が現われやすいので、地力に応じた肥料のやり方、施肥量が場所によって違って来る。それぞれの産地において肥料試験を行うなどして施肥量を決める必要がある。

ダイコンは地力があり過ぎたり、窒素肥料が多いと曲ったダイコンが穫れたり、ひげ根が太くなったり、肌のきれいなものが多く穫れないことがあるので、地力に応じた施肥に努め、収穫期ころになるとダイコンの下葉が少し黄味のあるくらいのもに曲りが少なく品質の良いものが穫れるから、この辺のことをよく理解して品質の良いものを多く穫るようにする。

4 適期収穫の励行

野菜では大きさ・形のほか熟度なども揃わないと市場では高く評価されないので、適期収穫を強力に推進して品質の向上を図る必要がある。

メロン、スイカなどは熟度がこないと収穫ができないうが、未熟果・過熟果の出荷を避けるため、着果標識などで収穫期を決め、熟度にムラを生じないようにする。

最近の消費傾向をみるとキャベツ、レタスなどは完全結球よりも八分結球程度のもものが好まれ、ハウレンソウは京浜市場で草丈25cm、太さは200g当り6~8株のもものが好まれるから、栽培に当たっては、播種する時期、1回に作付する面積は収穫・調整の作業能力にあわせ、ハウレンソウの草丈が25cmになったときに一斉に収穫ができるようにする。